

文樂の新作改作淨瑠璃熱

變態史劇（活歴）の影響など

明治維新といふ乾坤一擲の大變動は、思想的にも異常な革命があつて、西洋崇拜とこれに反動する歴史的懷古趣味とが、不均衡な矛盾を起して外的に現はれて來た。かうした變調は一般社會の上ばかりでなく、演劇界にも當然その現はれを見せ、わが固有藝術の文樂座の人形淨瑠璃にも不可思議な姿をあらはしたのである。淨瑠璃史の上の小波動として、記述する必要があると思ふ。

時世に觸れることに敏感であつた當時の文樂座の經營主植村文樂翁（大助）が、盛んな活躍をつゞけてゐた時のことだから、無論かういふ姿を見せたのは當然のことではあるが、明治五年十一月十五日初日の松嶋文樂座の「出世太平記」に早くもその發芽を見せてゐる。これは三日本記の改題で、武智を明智、眞柴を羽柴と改めてゐる。こんな程度でまだ内容に觸れては

みないのだから、活歴とは云へ、それはほんの鋒錠のあらはれに過ぎない、だが年と共に次第に濃厚になつてくる。翌六年一月には文樂の舊地博勞町稻荷社内の芝居で（博勞町の文樂座は五年冬に焼け直ちに新築、その舞臺開きと續いて一興行だけ此處に移つて興行した）史實かぶれの忠臣藏を惣掛合で出した。判官を淺野内匠頭、勘平を萱野三平、由良之助を大石内藏之助、師直を吉良上野之介、九太夫を大野軍右衛門、本藏を梶川與三兵衛、郷右衛門を原惣右衛門、平右衛門を寺坂吉右衛門と實録ぶつたまではわかつてゐるが、おかる、おいし、となせ、顔世、小浪、定九郎、伴内など、穿鑿の路に迷つたらしいのは愛嬌である。

而してその年六月、松嶋文樂座での『鎌倉三代記』には、鎌倉の二字を故意に削つて、角書き付きの仰々しい名題が幅を利かすことになつた。こんな風に、

大元帥は眞田左衛門尉奇術の軍配

名將は徳川老

君智仁の陣取

簇大將は後藤又兵衛英勇の鋒先

三代記

陣屋を「茶白山陣所」、和田兵衛屋敷は「後藤又兵衛屋敷」、摺針太郎住家を「長曾我部住家」、三浦之助別れを「木村母閑居」などと改め、人名も、木村重成、徳川老君、眞田幸村、内大臣

秀頼、淀君と悉く實名を用ひて床本に大改正を施し、同年八月このまゝを京都の都萬大夫座へ持越した時には、「實傳大阪夏陣記」と單刀直入に題を變へてゐる。これ等はいふまでもなく徳川幕府を憚つて書いた舊來の作品を、明治政府になつた上は、誰れに憚ることやあらん、と云つたやうな、殻を破つた心持から來てゐることは知れきつてゐる。この史實かぶれの傾向は、東京に於ける、九代目團十郎の史實芝居が勢ひを得るに及んで、いよいよ猛烈になつて來てゐるが、植村文樂翁の策戦であつたことはいふまでもない。(他の諸座ではこの傾向が無いところから見ても)ところが團十郎の活歴芝居は——活きた歴史の意味で、史上の人物や風俗を如實に活躍させる芝居といふことで、文士假名垣魯文の新造語——人形淨瑠璃の單に外題だけの活歴かぶれとは違つて、衣裳、道具、持物等に至るまで史實を正して、明治七年七月、河原崎座再興の初興行に、備後三郎楠未來記に、正成を烏帽子裝束といふ史實張りて演じて世間を驚かしたが、結果は、三河萬歳だなどといふ酷評を受けるに止まつてゐた。だが團十郎が最初に活歴の鋒先を見せたのは、明治六年五月の「浪花眞田軍記」であると云ふことである、だから文樂の五年十一月の方が一步を先んじてゐるわけである。ところが團十郎の方では、その後福地櫻痴居士に注告されて一時は活歴を思ひ止まつてゐたが、これに代るに櫻痴式の史劇といふ

ものが段々幅を利かして來た。その流行熱が大坂へも流動してこれが芝居は勿論、文樂へも大いに影響を及ぼしてゐる。

先代萩の仁木彈正が原田甲斐になり、外記が伊達安藝とかはり、八陣守護城の北條時政が徳川家康、加藤朝清が清正、お通が淀君、と皆假面を脱ぎ出した。近江源氏先陣館の人名の如き、或は日本賢女鑑の題名を繪本賢女鑑、三日太平記から出世太平記更にまた豊臣太平記になるやら、信仰記を信長記にするやら、なんでも彼んでも事實でなければをさまらないといふやうな有様になつて來てゐる。ところが、團十郎が烏帽子姿だけの史實ぶりを見せたり、外題や人名だけの史實ぶりが、所詮は不徹底なものであつて、直ぐに識者からその淺薄さを嘖はれたのは當然の話で、單なる外題や人名の變更は内容との矛盾を直ぐ發見することが出来るからである。例へば、忠臣藏の大序で、冒頭の「佳肴ありと雖、食せざれば其味を知らずとは國治まりて善き武士の忠も武勇も隠るゝに譬へば星の晝見えず夜は亂れて現はるゝ」の星の字に忠臣大星を利かした文だが、これを大石としては、どうも句を成さない。太功記十段目でも、眞柴久吉なればこそ「こゝに刈り取る眞柴垣」と云へるが、羽柴垣では物に成らない。「小田の蛙の鳴く音」でよいのだが、織田に改名されては蛙の方から不服が出るかも知れない。かういふ例を拾

へば殆んど際限が無いが、八陣に、琵琶湖の段を浪花入江の段と改めた爲めに「水碧に砂明らかなる兩岸の苔」が變てこになる。この文句はどうでも湖の兩岸でなくてはならないわけで、淀川ではものにならない。こんなわけで、内容に伴はない徒らな時代かぶれの穿鑿癖は、單なる時代思潮のあらはれとしてのみ存して、次第にまた舊態に復して行くことになつたのも理の當然であらう。明治十六年一月の京都での忠臣藏上演の際には完全に復舊し、十八年から二十一年にかけて、もう全く活歴風の跡を絶つに至つてゐる。

併しかうした穿鑿癖がこんどは、新奇を逐ふ改作熱といふ傾向に變つて來た。いつの時代にも免がれ難いが、殊に明治維新と云ひ文明開化の風につれての新らしがりの流行であるが、可なり盛んに行はれた。無論不用意な改悪であることはいふまでもないことである。

その改悪黨には不幸にして當時第一位にあつた越路太夫なども混つてゐる。ちよつと例を擧げて見ると、

彦山權現誓助劍、毛谷村で、おそのが六助の名を聞いて驚き、ウツカリ見とれる條に、「エエわつけもない、なんの家來の一人や二人、どうなとしたが、よいわいなア」といふところ。これを「エ、わつけもない、モウ疑ひは晴れたわいな」と改めてゐた。

太夫の意思では、いかに戀人に逢うた嬉しさとは云へ、一味齋の娘ともあらうものが家來の一人や二人、死んでも構はぬといふやうな亂暴なことを云ふ筈がない。かういふので、この改作となつたと推測して差支ないが、穿き違への甚しいものであつて、おそのは相撲取のいたち川も驚いた程の「我れより拔群大女房」であつて、巴、板額の類の女丈夫で、骨柄も立派、劍道も名人、女でありながら親の敵を狙ふ、しつかり者。それが戀人の前に在つては何物もなく、（家來の如き勿論）女はやはり女である、と見て作者は至情的に、その味はひを書いてゐるのである。その苦心の狙ひどころを、理窟めかした解釋で、太夫は何んの顧慮するところも無く改作したので、もとより取るに足らぬことである。これに對して、對の挿話が一つある。それは名人豊竹湊太夫の、毛谷村である。湊は終始女丈夫として語り、この「なんの家來の一人や二人……」の此處のところは越路とは反對に、語調一轉、いかにも處女らしい羞恥を含んで戀人の前に女らしい情合をあらはすことに成功したと云はれてゐる。天下に太夫らしい太夫なしと言ひ放つた團平も、この語りぶりには感歎の讚辭を惜氣もなく呈してゐること、逸話としてのこつてゐる。

この太夫ばかりではない、先代大隅太夫（後年のことだが）の如きも、双蝶々の橋本の段で、

駕の甚兵衛が娘の吾妻を誡しめるところ「きのふ洗ふた單物、四文が糊を棒にふつた」といふ文句、四文の糊では多過ぎるからとて四文を二文に改めて語つた。これも事實穿鑿に墮した改悪で、四文を二文に直しても一文にも値ひせぬ、かういふ類は随分數多く行はれた。

斯うした一方では、明治以前、天保から明治二十年頃にかけて、文樂その他の人形芝居に、増補改作や新作物が相當に幅を利かせて迎へられてゐる情勢を見道すことは出来ない。こゝで、ちよつと頭を巡らして、在りし昔の新作淨瑠璃といふものを振返つて見ると、古くは元祿享保の頃に、近松門左衛門が從來の舊作ばかりの斯界の積弊を破つて、義太夫の爲に每興行必ず新作を與へて以來、その後の舞臺は殆んど新作ばかりを上演して舊作は全く封鎖されてゐる。その例外として、好評を博した狂言を二度演ずる場合は、わざわざ斷り付きの口上を掲げてゐるくらゐであつた。それが寶曆明和と斯界が漸衰するにつれて、作者の力も衰へ、たまたま近松半二出づと雖、其後は取り立て、創作力の勝つたものはなく、たいていは古い狂言の煎じ直しや焼き直しに過ぎないといふ情勢になつてきたが、天保に入つてから、やつと山田案山子の「生寫朝顔話」、「梅魁蒼八總」（八大傳の雛案）、「浦嶋太郎倭物語」、「契情小倉の色紙」などが出てゐる。かうした衰滅期に新作の現はれない状態が、一度び名人三代長門太夫が擡頭するに

及んで、維新前後から明治へかけて、ちよいちよい新作物を散見するに至つたのは甚だ理由あることだと思はれる。

嘉永五年九月、道頓堀竹田の芝居で、その長門太夫が江戸から歸阪して來ての、お土産狂言に「花雲佐倉曙」の新作淨瑠璃がある。而かもこの宗五郎住家は好評だつた、作者は佐久間松長軒、登與嶋玉和軒とあるが、佐久間松長軒は、佐久間傳次郎こと三代長門太夫の雅號、(松長の松は長門の家が、若松家といふ杜若の名所と云はれた河堀口の料亭の名から、長は長門の一字)、玉和軒は長門の腰巾着とも云はれる人で、チャリ語りの竹本多滿太夫のこと。要するところ、此淨瑠璃は江戸の講釋種で誰れかと作つたものに、長門が多少の改作を施して作章したものだらうと推測される。作曲の方では近代の名人二代豊澤廣助がある。(代々廣助中の第一人者)通名を「新らし屋」と云はれたほどで、後年京都の祇園町に住んで、専ら新淨瑠璃の節附をやつた。(文化——天保)

初代鶴澤勝七(西宮勝七)も節附の上手。更に斯道の篤學者で大恩人に松屋清七(初代鶴澤清七、文政九年歿)がある。古來の三味線の譜を整理統一して符章を設定し、今日にまで永くその範を垂れてゐる。

加古の豊澤團平の作章の妙は、今更言ふまでもなからう。

當時の番付から新作と思へる狂言を拾うて見ると、浪花大汐譚、播磨渦浦朝霧、大内裏相馬錦繪、朝鮮征伐昔物語や、團平作曲の大和錦朝日旗揚などが眼につく。文樂座主の逸物文樂翁は活歴かぶれの似非史實淨瑠璃を試みて失敗したが、根が新し好きて文才もあつたから、珍しい昔の狂言や、その増補改作や、更に新作にも手を染めてゐる。未發表の新作で、勝鬨源氏白旗といふ十二段續きの長篇が存してゐるといふことである。その他一幕物の新作改作の二三を上げると、酒吞童子の山姥隠れ家、千本櫻の嵯峨庵室、相馬錦繪の伊賀壽太郎館、伊賀越の伏見北國屋、菅原の柘榴天神かけ合、大江山の頼光館碁立、日本竹取物語の竹取翁閑居、伊勢音頭の増補油屋、菅原の配所、中將姫のひばり山、忠臣藏の本藏蟄居などがある。以上のうち、その二三を除く外の悉皆は、總て五代目竹本彌太夫（俗稱堀江の大師匠）が新節章を附し、そして悉く文樂座で自ら實演したものである。彌太夫は後に敘べるやうに、人情味、性格表現に妙を得た新進で、この點、文樂翁と意氣投合し、共に文を語り藝を論じ合うてゐた。斯くて文樂翁は興行上の至寶として越路を愛し、文藝の友として彌太夫と親しんでゐたらしい。

この彌太夫も、巨匠三代長門太夫の末弟であり、學者の四代長門太夫に愛されてゐただけに、

その遺風に化せられて、淨瑠璃の新作も書けば、作曲もやつた。日露戦争の當時、關西の素人淨瑠璃界を席卷して流行した、俗に「梅原」の一段は、この人の作曲であり、作は村松柳江との合作「日露戦争薰梅忠義魁」梅原留主宅の段である。その他「明治美談孝行娘」眞言阪裏長屋の段、「浪花葎芦噲聞書」古畑兄弟争ひの段、「遠征旅行日本譽」福嶋少佐邸、「四つ谷怪談」お岩稻荷の段、「戀八卦昔曆」眞如堂の段、「増補義士傳」大石十八ヶ條申開きの段、「善光寺靈驗記」善光住家より善光寺まで、「邯鄲曲短夜夢」(錦秋園十三原作 彌太夫補作)、「義士傳おかる注進」、「義士傳彌作鎌腹」(増補作)、「同浅草門前」、「増補佐倉曙」儀作切腹の段、其他滑稽物頗る多く、それは前項チャリ淨瑠璃の條に述べたが、就中「猫戀風雅妾宅」妾宅戀猫の段有名、「五代友厚實川延若冥途嘶」閻魔の廳の段の如きは當時大評判であつた。總て新作補作の類四十餘種新しく作曲した物は殆んど際限なき程。

巨匠長門太夫が連りに改作を試み、また新作を歓迎してゐたことは既に述べたが、名人團平も同じく良い新作物をいつも渴望してゐた。彌太夫の新作熱も恐らくこの邊から感化作用を受けたと見える。

團平の妻女の加古千賀女が新作に筆を執つたも、夫君團平の感化が大に影響したものに違ひ

ない。新作改作幾篇かのうちでも「壺坂」は著名である。他に、松前屋五良兵衛、大和錦、猿が島敵討、親鸞記などが數へられてゐるが、これには「勸進帳」の改作者だといふ淡路の赤松戸右衛門（烏聲）の作が混じてゐるやうだ。

文樂翁が歿してからは、新作嫌ひの越路（攝津大掾）時代となつて跡を斷ち、彦六、稻荷、堀江系の方には、團平、彌太夫の息吹きからか、比較的新作が多く演ぜられた。

文樂翁在世時代の新作勃興の機運は、かすかながら動き出したが、翁の歿後は、一座主腦部の新作忌避と、作者のないことなどから、斷絶したのは幸か不幸か判らないが、明治初期の、何かしら新しい方向へ進まう進まうとする、現狀に満足できぬ社會情勢が、こゝにも反映してゐるのだ。